

平成 22 年度長野県生涯学習審議会 議事概要

日 時：平成 22 年 10 月 28 日（木）
午前 9 時 30 分～午後 3 時 30 分
場 所：松本大学 上土商店街
いばらん亭 新村公民館

出席委員 白田直子委員、小島佐和子委員、白戸洋委員、関ひとみ委員、
土井進委員、本多得爾委員、松村純子委員、水野龍二委員
欠席委員 内野安彦委員、塚田芳樹委員、中村雅代委員

オブザーバー参加 御子柴宏県公民館運営協議会副会長

県の出席委員

教育委員会	山口利幸教育長
生涯学習推進センター	中村勝所長、三溝裕子専門主事
中信教育事務所	池上良満生涯学習課長
南信教育事務所飯田事務所	太田壽久所長
南信教育事務所	山内伸治指導主事
文化財・生涯学習課	花岡隆夫課長、北島隆英生涯学習係長、 浦野栄一主任指導主事、蟹澤友司指導主事、 上原荘司主任

1 教育長あいさつ 《松本大学》

2 松本大学副学長ごあいさつ 【松本大学副学長 住吉廣行さん】

3 会長選出

委員の互選により土井進委員を選出。

4 会長あいさつ 【土井進会長】

おはようございます。昨年度の生涯学習審議会の答申を作った者として、今年度の生涯学習審議会は答申がどのように反映されているか、現地視察を行いながら検証して参りたいと思います。どうかよろしく願いいたします。

5 職務代理指名

会長の指名で、会長職務代理として白戸洋委員を選出。

6 視察概要説明 【白戸洋委員】

7 視察 「上土商店街」

《松本市上土商店街》

【増田志津子さん：上土商店街女性部長】

商店街の女性で、寂れてきてしまっている商店街を何とかしなくてはと7年前に女性部を発足いたしました。商店街をきれいにする「クリーン・グリーン活動」をはじめ、「元気市」、高齢者の居場所づくりとして童謡を楽しむ「よいまちクラブ」など様々なイベントを開催してきました。

それまでは、昔からの商店街ですから、男性の皆さんがあの手この手で街づくりをしてくださいました。そこへ街づくりということすら知らない私たち女性が、急に街に出て活動を始めたので男性の皆さんには理解しにくい部分が多々あったと思います。しかし、女性部だけで何の障害もなく自由に活動させていただけました。

縁あって、松本大学の学生さん達と3年前から活動を共にしていただけるようになりました。商店街に何の関係もない学生さんたちが上土の街を活気ある街にしようと、女性部の活動に協力して汗を流す姿を見て、男性の皆さんも少しづつ協力してくださるようになってきました。

松本大学の皆さんとのつながりが大変ありがたく思っています。10月には、老舗菓子店が多いこの商店街で「スイーツラリー」を企画し開催してくださいました。今まで女性部と学生さん達の活動を遠くから見ていた商店街の人たちも、徐々に何らかの形で協力応援してくださる姿が見えるようになってきました。

私は、「街づくりイコール人づくり」と強く感じます。寂れつつある商店街ををなんとかしよう、街づくりをしようと思った女性とのつながり、共感して活動に加わってくださった大学生の皆さんとのつながり、人と人のつながりでしか学べないものを街づくりを通して教えていただきました。

【松本大大学生】

上土の皆さんはあたたかいのです。「若い人が来てくれてありがたい。」と来ただけで感謝してくださる。学生に対して熱心になってくださる。そんな皆さんとつながることでも私たちが学ぶことができます。

【御子柴宏公運協副会長】

上土は大正口マンの町です。地元の皆さんが熱意を持ってやってらっしゃる。建物などハード面の充実とともに、人と人のつながりができてきています。

8 視察 「いばらん亭」

《松本市巾上 松本駅アルプス口》

【筒井敏男さん：巾上西町会会長 いばらん亭店長】

松本駅西口の再開発計画で、私の町会では3分の1の方々が転出を余儀なくされ85

軒の内26軒がいなくなりました。再開発の話では、巾上の住民は皆法律のことは素人で、そのことになるとさっぱり分かりませんから、交渉になると一方的に言われてしまいました。それによって敗北感みたいなものがありました。それを打破するにはどうしたらよいかということで、みんなで民法とか行政法とかを勉強しました。そんな学習会の中で地区住民が立ち上がって、いろいろな取り組みを行ったという事例を紹介していただいたので、ここ巾上でもできるのではないかということになりました。私は松本男女共生市民会議に10年間に渡って参加させていただき、会代表を拝命し、その役割がすんだところでした。今度はお世話になった自分の住む地区で役割をはたしてみようということで、街づくりに取り組んでいます。とりわけ女性陣ががんばってくれています。男女共生であり、男も女もないのです。みんな仲良く肩を組んでやっています。私は元々電気屋です。退職してここに来ました。まだ名古屋にいる時に、この町会長をやってほしいということになり、本来は65歳くらいまで会社に残ってくれと言われるのですが、この町がかなり危機的状況だったので途中で辞めてこの地元に戻りました。

これから私が目指していることは、高齢者がゆったりとスローライフができる町です。ここは広い道になってしまったのですが、そこはここに来る人たちにお貸しして、その広い道路の車社会に我々は巻き込まれずにゆっくりと生活していこうと思っています。ここを訪れた人もユックリズムで松本を味わってもらいたい。町づくり「ゆったり夢街道」という松本を歩いて巡る道路にしたい。松本中をそういう道路にしたいというのが望みで、その一端ができればいつ死んでもいいと思っています。

スタッフは三交代でやっています。この雇用条件が表向きは65歳以上となっています。スタッフの中には休んでいる人もいます。自分自身や連れ合いの事情というのがその理由です。そういうことがこれから頻繁に起こってくると思います。自分自身もそうですし、誰でも問題や課題はあります。しかし、それをみんなで支え合っていくことだと思います。

ここで働いている人は私の欲目かもしれませんが、はつらつとしていて若いです。私たちのモットーは、「ぴんぴんころり」ということで、働きながら生涯を閉じられれば本望かなと感じています。あと何年、何十年できるかわかりませんが、どこかでほころびるまではがんばりたいと考えています。

9 視察 「新村公民館」

《松本市新村公民館》

(1) 松本市の公民館の活動説明 【松本市公民館主事会】

(2) 松本市新村公民館の活動説明 【新村公民館長・主事】

10 意見交換

土井進会長退席のため、白戸洋会長職務代理が進行を行う。

【白戸洋会長職務代理】

少し、私の方から説明させていただきます。以前コミュニティーセンター構想という

ものがありました。日本の官僚機構はすごく優秀で、もう1970年代に今の高齢化の問題、あるいは財政負担の問題について中央省庁では準備を始めていました。その一つの布石がコミュニティーセンター構想で、もう一つが社会福祉協議会が指導をする参加型福祉です。当時すでに、将来住民が参加しないと福祉にならないと言い出していました。そんな流れに従って、この新村と隣の和田の二つを合わせて、元々あった新村公民館を廃止して、芝沢コミュニティーを作りました。しかし、それがうまくいきませんでした。勝手に行政がこれとこれが一緒になればいいと言っても、住民はうまくいかないのです。小さい新村と和田でさえうまくいかなかったのです。それで分離をして新たに新村公民館、和田公民館としました。身近なところ、自転車で通える範囲のコミュニティーを大事にしてやっていくというのが明確になり、市の基本構想となっていきました。

もうひとつ新村公民館と松本大学でいろいろやらせてもらってますが、ややもすると「新村はずるい、松本大学があって」とか「松本大学があるからあんなことができるんだ」と結構皆さんおっしゃる方がいらっしゃいます。しかし、実は歴史の話をさせていただくと、松本大学の前身の松商短大ができて30数年経ちますが、今の松本大学が開学する2002年の直前までは、地元と大学の間は決していい関係ではなかったのです。最初、松商短大は市街地の中にありまして、土地を買って移転をするということで、当時空いていた新村小学校跡地につくる計画ができましたが、地域では反対運動が起こりました。大学側としてもすぐそばは松本市ではなく波田町ですし、何でそんな場所に行かなくてはならないのかという意見もありました。それでも学園関係者や松本市当局の熱意と努力で条件付きで受け入れということで新村に移転してきました。しかし、大学環境問題対策委員会もできて、大学生をマイクロバスで送り迎えをして通学路を歩かせてもらっては困るという話まで出ました。お互いに不信感がありました。

大学側とすれば、あまり自分たちはここでは歓迎されていない、出て行ってくれと聞かれている。そこで、松本大学の開学にあたって、新聞に出たのは「松本大学、今井に移転」でした。それが一週間でひっくり返ってこの地にできることになりました。それは数年前から婦人会のおばちゃんたちや公民館での学生たちの関わりがあって関係ができてきていた。そのおばちゃんたちの働きで、夜の間が変わったのではないかと思います。

また、大学ができる頃に中部縦貫道ができる等、大型の公共事業などが沢山出てきました。その中で、地域の人たちの中に、このままだと、ここがどんどん変わっていってしまうんじゃないか、という危機感が生まれました。これは何とかしなくてはいけないということで大学と一緒にやらないといけない。また、大学の方も地域と一緒にやらないと、良い学生は育てられない。大学の教員だけが学生を育てる時代ではないという思いが変わってきました。そんなお互いの思いが一致したところが出てきたのです。ある意味、大学がひとつのきっかけにはなりましたが、その前何十年と大学があったからではなくて、地域がやる気になったからだと思います。そのベースとなるのが公民館を語る会で、町会長や運営委員会とは別に公民館に思いがある人に自由に新村の公民館をどうするか話し合ってもらった。そのあたりが今の新村の公民館活動につながってきている

のだと思います。

委員の皆様からご質問やご意見などを伺いたいと思います。

【臼田直子委員】

お話を伺わせていただいて、本当にどういうことを考えていくかが大切だと感じています。公民館の皆様方が学生を巻き込んで、地域づくりが自然にできる環境となっているところがすばらしいなあとお話を伺って感動させていただきました。同じ長野県でありながら違う世界を見たような気がしております。なかなか進まないということは困ってないということだという話がありましたが、本当にそうだなあと思いました。やはりそれは自分のこととして捉えて、一步踏み出していないから先に進まないという状況があるのではないかと今日は強く思わせていただきました。何かひとつでも地域でできることがあれば、今日のお話を参考にさせていただいて、できるところから一步でも踏み出させていたいただきたいなあとと思います。どこからというところはまだはっきりしませんが、今日はいろいろいいお話を伺わせていただいたのでありがたかったと思っております。

【小島佐和子委員】

私が今日視察をさせていただいて、とてもすばらしいなあと思ったところは、女性が元気がいいことはいいことなんだなあとということです。私も今年度、地域で区長をやっていますが、どこに行っても男性ばかりなのです。その中でなんとかやっていますが、それってとても変なことだと思ってくださる方もいらして、そういうことを思い始めた時代なのかなあと感じています。そういうチャンスがある時代ですので、今日の視察させていただいた皆さんのように、もう一步出て元気を出さなくてはいけないなあと感じています。

それから生涯学習審議会という役をやらせていただいて思うのは、やはり考える方々はとてもすばらしいことを考えてやってくださっている。それを、他の人たちが知らないということは、もったいないことをしているなあとということを感じました。そこで、今回答申したこの生涯学習というものを、もっと多くの人にどうやったら知らせていけるのかなあ、ということをお教えいただいたり、自分でも考えていきたいなあと思っています。

【関ひとみ委員】

私も感想を述べさせていただきます。私は長野市に住んでいます。松本市でいう町内公民館を長野市では地域公民館と呼んでいます。私も自分の住む地域に帰りますと、地域の公民館の文化部長という役を受けています。そんな自分の立場と照らし合わせながら公民館活動のお話を伺わせていただきました。この地域に住んでいるから、地域のことを知る、地域に愛着をもっともっと持ってもらいたいと思うと、地域のことを学ぶ・知る・参加するということが一番重要であると思います。私のように長野市の町中に住ん

でいるものにとっては、隣近所のつきあいも大変希薄な状態にあります。そんな中で私が自分の地域の公民館の活動を通して、やはり人と人とのつながり・関係・関わりというものはお互いを支えていくものだろうと地域の中で感じてきました。今日午後松本市の事例を伺いながら改めて自覚した次第です。

今日の視察のことですが、学習する学ぶということは、決してお仕着せのものではない、一方通行のものでもない、学ぶことの楽しさというのは人と人とのやはり結びつきだということを感じます。そして、人と人とのつながりが又新たな人呼び寄せる、それがまた学びの可能性につながっていくということを大変強く思いました。巾上の方、上土の方など、それぞれ地域で活躍されていらっしゃる方の表情は本当にすばらしくて生き生きしていて、表情がとても輝いて見えました。それと一緒に松本大学の学生さんも本当に充実した笑顔をされていました。私は今日一日、私自身が沢山元気をいただいたような気がします。ありがとうございました。

【本多得爾委員】

私の所は町ではなくて村です。高山村といいます。長野市にも須坂市にも近く、その二つの市に勤める人たちや、定年後に第二の人生を田舎で過ごしたいという人たちの住む団地があちこちにできています。新しい人たちが村外から来て、古くからいる人たちと馴染んでいる団地もあり、また、古くからの人たちと画然と別れている団地もあり、その中間の団地もあります。

第二の人生を高山村で過ごしたいという人たちは、都会から離れて自然の中で暮らしたいという夢を持ち、また今までの半生の中でいろいろな技術や資格を持って働き、定年退職してきた人たちがいて、大所高所から、あるいは自分の描いている夢から、いろいろあしたの方が良い、こうした方が良いという意見を持っています。古くからの人々の気づかない視点からいい助言をしてくれます。そういう新旧の人たちが集まってグループを作って、昔からの高山村の自然を生かし、荒廃地を耕し、ソバや麦をつくり、収穫した麦でうどんをつくって名物にまでしてしまっていて売り出しています。そんな意欲を後押ししようと村もソバを収穫する機械を買ってくれました。その地にある文化財であるお宮の周りの景観を文化財保護係の立場から、こうしてほしいと述べると、じきにみんなで力を合わせて作業し、言われた通りにしてしまう。その理解力と実践力には舌を巻くと同時に、いつしか自然と周りの地域にもやる気を波及させてくれています。

今日、松本大学との連携や指導で、町おこしをしている方々の実践を見学させていただき、私の村のやる気のある人たちと共通したものを強く感じました。何とかしなければと考える昔からの人たちと、古い伝統ある町並みの存在。そこに大学の専門家の大所高所からの見方が一緒になって伝統を生かして新しいものを作り出すという作業。学生さん達も生き生きと地域にこれだけ関わっていることに「今の若い人も捨てたものではない」と言い知れない嬉しさと希望を感じました。

【松村純子委員】

今日の視察で体験から学ぶ大切さを感じました。

先日サンデー毎日だったでしょうか、長野県の特徴が出ていました。長寿県であることと全国一の公民館の数ということでした。公民館の数は全国1なのですが、どんな活動をされているかとても興味を持って参加しました。

昨年答申を出しましたが、午前の視察や午後の話では、その答申の中にある高齢者や青少年を結びつけた実践となっていました。

松本市公民館の課長さんの話では、青少年期の頃や働きざかり世代の参加が少なく、そこをどうしていくかという課題が述べられていましたが、これは答申の目指していたものと同じです。

質問ですが、松本市公民館の組織では専任の方兼務の方などいらっしゃると思いますが、地域の特性や課題を把握して、地域のネットワーク作りの調整役となるように、職員の力量を磨く研修の充実について答申で述べています。研修の充実は大切と思いますがどのようにされていますか。

委員として、少しお話したいと思います。せっかく議論して作成した答申ですから、県民の皆さんに知っていただくことが必要だと思います。今回の視察のように face to face で答申についてお伝えし、その取り組みの様子を委員として知ることが必要だと思います。伝える方法としてどのような方法がいいのかは、すぐには答えられませんが。講演等の機会でお話しすることや、インターネットなどで情報発信することを委員も考えていかなければと思います。

また、平成21年10月に出した答申が、長野県の生涯学習の中でどうであったのが検証していかなければいけないと思います。答申を出す前と出した後の取り組みを検証していくことです。そのためには、まず私たち委員としても様々な機会をとらえて、皆さんに答申の内容についてお話をしていくことが大切だと思います。

【水野龍二委員】

住民が地域に関わることによって自分の地域を見直すということがあります。自分の地域が好きになってそのことに一生懸命になる。僕などもそうです。また、地域に密着すると地域も変わります。

今日は皆さんが公民館活動を一生懸命やってらっしゃることがよくわかりました。私の住んでる集落は小さく60戸くらいしかないのですが、そこでもあらゆるサークルがあって公民館の活動が年々盛んになってきている。活発になってくるとやっぱり皆で地域を考えることになっていきます。皆でコミュニケーションをとって自分のコミュニティを守ることを真剣に考えていかなければいけないと思います。

【御子柴宏公運協副会長】

松本市は36の公民館、そして475の町内公民館があります。それぞれの公民館が巾上や上土、新村公民館のようであれば、松本市の町はすばらしい町になっていると思います。今日見ていただいた新村公民館なり、巾上、上土はすばらしいですが、たとえ

ば私のいる寿公民館は3つの公民館のようにお話できることはなかなかありません。そういうような公民館も含めて、松本市の公民館なんです。新村公民館は、こうしなければいけない、こうしたい、そして地域の課題などすべてのことに対応している。しかし、そういかない公民館も多い。そうした公民館や、町内公民館も皆さんの住んでいるそれぞれの地域や風土にあった形での取り組みは必ずやっている。そうした活動が大切なことだと感じています。

【白戸洋会長職務代理】

今おっしゃった通りだと思います。ただひとつ言いますと、ここ10～15年、新村公民館でやってきたことはそう大きく変わっていないのです。何のためにやっているのか、やってきたそのものよりも、何でやっているかということが、やっている人達の中で共有化されてきています。巾上も言ってみれば一番課題を抱えた町会の一つでした。新村だって、ものぐさ太郎の伝説があるくらい、寝っ転がっている人にぎり飯をあげるような地域ですから、余計なことはするなという地域でした。保守的なところで、婦人会のおばちゃんがあわあ騒いでも、みんな知らんぷりをしていました。女衆がやってるね、と言うくらいでした。それがほんの2～3年で変わりました。そして何か大きくほとんどが変わるのではなくて、ある部分がころっと変わる。それが公民館であるのかと思います。そこを変えるだけで金属疲労をおこしていたものが、2～3年で大きくころっと変わるくらいの変り方になってきているのです。

質問のあった主事さんへの研修について松本市の様子をお話してください。

主事の研修について説明

【松本市公民館主事会】

【御子柴宏公運協副会長】

今公民館を中心に社会教育、生涯学習について、全国でも長野県でもそうですが、行政の経済性や効率性ということから公民館や社会教育が首長部局に移転になったり、公民館が指定管理者制度になったりしてきています。また、都市内分権として、公民館も行政も含めて地域の中に地域協議会ができて、それぞれに地域の方が要請されて、地域の課題を検討していくやり方が費用対効果もいいのではないかといい、公民館等の存在が打ち消されていくような傾向が出てきています。全国でもまた県内でもそういう事例があります。飯田市でも長野市でも上田市でもそうした動きがあります。松本市でもそうなりかねないような状況が生まれてきています。公民館という存在そのものが生涯学習とは逆方向になっている、そういう状況にある気がします。そうしたものを受け入れざるを得ないのか、生涯学習の場としての役割はどうなっていくのかという心配をしています。公民館としてどうすべきなのか。そういった点についても考えていきたいと思っています。

【白戸洋会長職務代理】

御子柴さんがおっしゃったとおり、少なくともここ10～15年本当にそうした傾向になってきています。長野市の場合はどちらかというと行政の効率から、飯田市の場合は又ちょっと違うのですが、上田市も同じ悩みを抱えています。ひとつ言えることは、地域づくりというものを考えた時に、確かに机上で考えるとそうしたことになるのですが、たとえば松本市の一番大きな町会の予算規模は1千万円に満たない程度です。それがほとんど前年踏襲されている。もし、都市内分権となって、地域のことは地域の皆さんで考え解決していこうと言われた時に、たぶん町会長とかいなくなるのではないかと。町の役員をやれと言われても、それに耐えるような民主的な選ばれ方もしていないし、それだけの基盤も持っていない。そうなる誰も受ける人がいなくなっていくのではないかと。都市内分権を進める長野市などでは、また元の行政に戻ってきたりしている。住民に分権を担うだけの力量がないということが正確なところではないかと思えます。たぶんそれは長い時間をかけて、人を育てて初めてできることだと思うのです。

行政効率の話からすると矛盾するものがある、内閣府もその辺は気がつき始めているのではないかと思えます。内閣府の審議会に意見を述べるように依頼があったのですが、一部では気がついているのでしょうか。だからこそ、こうした答申をきちんと長野県で出していくことが大切になります。市町村の現場に行くと、とてもそれどころではないというのが実態です。しかし、それでも必要なことだと言うことは大切だと思うのです。去年の暮れに公民館の関係で発表させてもらったときも、御子柴さんのおっしゃったようなことをあげて、だからこそ長野県がしっかりやってほしいという話がありました。大変厳しい状況であるということ間違いのないのです。その中でこの審議会もそうですが、いかに今日のようなことを積み重ねて説得力を持って、現実にしていくかという段階に入っていると思えます。そういう意味で私も公民館とも一緒にやらせていただきたいと考えています。

この会の議論を事務局では「学びの成果を地域に生かし、地域コミュニティの再生につなげていることについて課題や意見を求める。」「視察から生かせることの意味を求め。」と考えられていたようですが、今までそうしたことが出てきたと思えますので、これをどう深めるか今後の委員会の課題にしていきたいと思えます。

これで終了とさせていただきます。皆さん、長い間熱心に視察や討議いただきありがとうございました。